

〔研究ノート〕

アジアにおけるシェイクスピア上演アーカイブの構築と上演 研究の可能性¹

The Creation of the Web Archive of Asian Shakespeare Productions and Scope of Performance Studies

小林かおり・末松美知子（群馬大学）
Kaori Kobayashi, Michiko Suematsu

はじめに

昨今、アジアのシェイクスピア上演は世界中で新たな注目を集めている。蜷川幸雄、オン・ケン・セン、オ・テソクといった演出家たちは伝統と革新を新たに掛け合わせ、言語とジャンルを操り、観客を引き付けている。彼らのシェイクスピア上演は我々にシェイクスピア作品の新たな面を見せてくれるばかりではなく、西洋文化と東洋文化の融合の様を提示する。

シェイクスピア上演研究の場においても、1990年代以降、アジアのシェイクスピア上演を対象とした研究が活発に行われるようになってきた。A|S|I|A (Asian Shakespeare Intercultural Archive)は、その流れをさらに進め、デジタル化時代にふさわしい新たな演劇研究の可能性を探るべく、アジア諸国のシェイクスピア上演映像とそれに関わる様々な資料を一括して収録したアジア初のシェイクスピア上演ウェブ・アーカイブである。欧米のシェイクスピア上演ウェブ・アーカイブの多くは、写真や上演記録を中心としており、映像を収めてあっても字幕付きではない。A|S|I|Aは、字幕付き（英語、日本語、中国語、韓国語）の上演作品の映像全編、上演作品の詳細な分析データ（メタデータ）、上演プログラム、写真等の資料から構成された極めてユニークなアーカイブと言える。現在までに、日本、台湾、中国、シンガポール、韓国、マレーシアの劇団より計51作品の上演映像及び著作権を取得し、A|S|I|A上で上演映像、分析データ等を公開している²。

シェイクスピアの主題はアジアの文化および演劇文化と多彩な形で関わっているが、A|S|I|Aはアジアの文化背景を比較検討しながら、多様なシェイクスピア上演作品に触れられるオンライン・リソースである。本論ではA|S|I|Aがシェイクスピア上演研究や教育に及ぼす影響や新たな可能性を考察する。

¹ 本稿「アジアにおけるシェイクスピア上演アーカイブの構築と上演研究の可能性」は、2013年11月に相山女学園大学で開催された日本演劇学会秋の研究集会「演劇とアーカイブ：集積から構築へ」における共同発表の原稿を、末松が一部修正したものである。なお、上演ウェブ・アーカイブA|S|I|A (<http://www.a-s-i-a-web.org>)は、小林氏と末松の共同研究として申請した3件の科研費助成（2007-2009年度基盤研究（C）19520291、2010-2012年度基盤研究（C）22520347、2013-2015年度基盤研究（C）25370268）により構築した。

² A|S|I|Aには、2016年10月現在54作品が収録されているが、最終的には70作品の収録を予定している。

1. A|S|I|A 誕生の背景

A|S|I|A は、シンガポール国立大学のプロジェクト Relocating Intercultural Theatre: A Web Archive of Asian Shakespeare Productions と科学研究費助成事業（群馬大学・名古屋市立大学）の共同プロジェクトである。A|S|I|A にはシンガポール、中国、インド、英国、米国、そして日本と、様々な地域の研究者、翻訳者、演劇関係者が関わってきた。インタラクティブで、ユーザーの主体性を第一に考えたこのアーカイブの特色を明らかにするために、まず A|S|I|A 以前のシェイクスピア上演研究における映像メディアの利用状況について説明する。

シェイクスピア上演作品の研究における DVD の活用は既に一般的だが、最近の新しい動きとしては、ライブ・ビューイングがあげられる。英国のナショナルシアター、グローブ座、ロイヤルシェイクスピア劇団は、ライブの上演を国内外の劇場や映画館、あるいは、オンラインで放映しているし、学校への映像の無料提供も行っている。例えば、グローブ座は 2013 年 8 月に『ヘンリー六世』三部作を屋外で上演しオンラインでライブ中継しているが、中継中あるいは幕間に、ウェブ上で観客がコメントを書き意見交換するというインタラクティブな試みも始まっている。

ウェブ上のデータベースとしては、舞台写真を収蔵した *Designing Shakespeare*、*Photostage*、映像を収蔵した *Digital Theatre*、*The Space*、*BardBox*、*Routledge Performance Archive*、*MIT Global Shakespeares* など、教育用目的の無料サイトから有料で映像をダウンロードできる商業サイトまで、多様化してきている。中でも、A|S|I|A と同様にシェイクスピア上演の映像を収めたウェブ・アーカイブである MIT の *Global Shakespeares* との比較は、A|S|I|A の特色をより明らかにしてくれる。実は、MIT の *Global Shakespeares* プロジェクトがスタートした時点では、A|S|I|A もその中に組み込まれる予定であった。しかし、一部の映像が *Shakespeare Performance in Asia (SPIA)* として *Global Shakespeare* に収蔵されたものの、方針の違いから、二つのアーカイブは独立した形を取る事となった。

その方針とは、1) 上演作品全編の映像を収蔵するか、2) 映像に複数言語の字幕をつけるか、の 2 点である。MIT のアーカイブは教育に主眼を置き、テーマやトピックに応じて場面を選び、複数の上演を教室で比較しながら議論することを目的としていた。現在は、アジアだけでなく、南アメリカ、ヨーロッパまで含めて収蔵作品数を 400 作品以上に増やしているが、*You Tube* からの短い映像等も取り込むなど、映像自体のクオリティにはこだわらず、上演の多様性に重点を置いている³。また、あくまでアメリカの学生の利用を主体に考えたため、英語以外の字幕の必要性は軽視されたままである。

³ MIT *Global Shakespeares*. <http://globalshakespeares.mit.edu/#>

2. A|S|I|A の特色

そもそも、ウェブ・アーカイブは、「時空を超える」演劇研究を目指している。地理的な理由から演劇を実際に観ることの出来ない観客や研究者のニーズに、制限つきではありながらも応えることができるのだ。MIT の *Global Shakespeares* プロジェクトのディレクター、ピーター・ドナルドソン が言うように、「ウェブ・アーカイブの活用により、世界中の全ての人々が容易に利用できる『活きた全集』‘living variorum’の構築へ向けて近づいた」と言えるかもしれない⁴。しかし、英語のみで、「世界中」の人々が利用できるというのは単なる幻想である。A|S|I|A は、アジアからの発信であり、まずアジアの利用者を念頭に置いて構築している。アジアにおいて使用言語を英語に限ることがいかに使用者を限定するかは明らかである。ゆえに、A|S|I|A は全てのページにおいて日本語、中国語、英語、韓国語という四言語を使用することでアジアでの利用を広げ、さらに、英語圏中心のシェイクスピア上演研究環境の改善をめざしたのである。

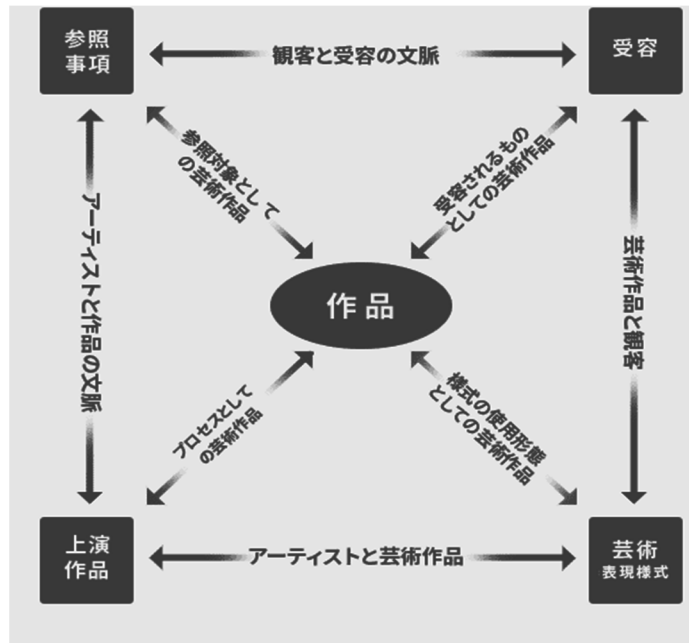
A|S|I|A の 2 つめの特色は、上演作品全編の字幕付き映像を収蔵していることである。上演作品全編の著作権を入手することには困難が伴ったが、各国の演劇関係者の協力により、現在までに日本、台湾、中国、シンガポール、韓国、マレーシアの劇団より 54 本の映像の著作権を得ている。テーマやトピックごとに場面を選んで映像を提供するのではなく、全編を提供することで、関心に応じて映像を取捨選択して利用できるよう、利用者の自由度を高めた。また、利用者は、映像を見ながら、コメントや疑問を映像脇のノートパッドに記入できる。時には翻訳を担当したプロジェクトメンバーが疑問に答えたり、利用者同志が意見交換するなど、インタラクティブな利用が可能である。

映像と同様に重要な A|S|I|A の構成要素が上演作品の分析データ（メタデータ）である。A|S|I|A では全ての上演作品の詳細な分析データを提供しており、そのデータは次の 4 つのカテゴリー「上演作品」、「受容」、「芸術／表現様式」、「参照事項」に分類されている。それぞれのカテゴリーは、いわば上演を理解する上でのベクトルで、それらを総合することで、上演作品をとりまく議論の場を形成することを目指している（図 1）。

- 上演作品 (Production) : 上演作品の制作、上演に関する基本的情報 (上演組織、上演日、場所)
- 受容 (Reception) : 上演に対する反響に関する情報 (劇評や観客によるブログ、演出家や俳優による自己評価)
- 芸術／表現様式 (Art / Forms) : 上演が用いる言語、表現形態、演出上の特色等に関する情報
- 参照事項 (Points of Reference) : 作品が参照している各種の文脈や関連する上演作品に関する情報 (上演作品が言及している対象)

⁴ Peter S. Donaldson, "Shakespeare Electronic Archive: Collections and Multimedia Tools for Teaching and Research, 1992-2008." *Shakespeare* Volume 4, Issue 3 (Sept. 2008), p.234 参照。

図1 A|S|I|A データベースの構成⁵



各カテゴリ内の分析データは、作品のすべてを包括的にカバーする情報を提供している訳ではなく、むしろ、作り手に関する鍵となる情報や、その上演を特徴づける芸術的な選択に関わる様々な情報の提示により、個々の上演のインターカルチュラルな側面を明らかにすることを目指している。また、データは、完全に客観的なデータではなく、ある程度分析者の主観も含まれている。データの探索は、トップページの検索ボックスにキーワードをタイプするシンプルな形式を取り、データ項目のリスト等は示していない。これは、利用者に最大限の自由を提供したいと方針のためである⁶。例えば、「人形」というキーワードによりデータを検索すると、図2のように「人形」を何らかの形で用いている上演作品が示される。写真下のビデオアイコンをクリックしてそれらの映像を観たり、上演作品の「バブル」(赤丸全体)をクリックして次々にバブルを開いていくことで、「人形」がその作品にいかに関わるかを示すデータを提示させることができる。

⁵ A|S|I|A ウェブサイトより。http://www.a-s-i-a-web.org/jp/database.php

⁶ A|S|I|A は2016年夏に改訂を行った。現在は検索した語句を含むすべてのデータが一挙にリストで表示され、データの比較がより容易になっている。

図2 A|S|I|A のサーチ機能



このほかにも、A|S|I|A はいくつかのツールを備えている。ワークスペースは、映像の必要な部分を切り取ってウェブ上に保存できるスペースである。映像のほか、自分で行ったデータ検索の結果も保存することができる。また、フォーラムはアーカイブ利用者が互いの意見や情報を交換できるページである。ここでの意見交換は、アジアのシェイクスピア上演に関心を持つ利用者のネットワーク構築を可能とするだろう。

3. A|S|I|A の可能性

以上見てきたように、A|S|I|A によって、アジア地域の上演のキャスト、劇評、インタビュー、チラシと言った基本的な情報を得るだけでなく字幕付きの映像を見ることが可能である。さらに、A|S|I|A はアジアのシェイクスピア上演の詳細な比較研究に役立つ。複数のアジアの上演の比較は、同じアジアでありながらも、それぞれの地域でシェイクスピアがいかにか異なって演出されているかを知り、上演を取り巻く社会的・文化的コンテキストと結びつけた作品理解を可能にする。このような上演の比較分析には、短い場面の比較だけでは不十分で、作品全編を通しての比較が重要となる。演劇の神髄である一回性を否定するつもりはないが、テキストを繰り返し読むように、映像を繰り返し観ることで見えてくる情報も研究上有意義なのだ。カメラフレームという制限はあるにしても、それ以外の編集は一切施していない映像は多くの情報を与えてくれる。クリステ

イ・カーソンが言うところの 'post-publication model' のメディアとして、利用者に自由に、繰り返し、A|S|I|A は利用されるだろう⁷。

教育においても A|S|I|A は新しい可能性を提供している。A|S|I|A を使用すれば、場所や時間を限定することのない教育が可能となる。すでにシンガポールと韓国の A|S|I|A プロジェクトチームメンバーの共同授業では、両国の学生が A|S|I|A を利用して意見交換する同時遠隔授業を行ったほか、今後 e-learning のシラバスに組み込んだ形で、A|S|I|A を継続的に授業で利用する計画も進んでいる。オンラインのデジタル化された教材を使うことによって、シェイクスピアは「古典」としてだけではなく、現代劇としてアジア各地で生きていることを学生に教えられる意味も大きい。その際に、字幕は、英文科や英語を専門とする学生以外のための授業でも大いに役立つだろう。

おわりに

アジアのシェイクスピア上演研究が本格的になったのは 1990 年代だと前述したが、まだアジアの上演を語るパラダイムが確立されているとは言い難い。私たちは、A|S|I|A が、西洋中心主義の上演研究の流れを変える、新たなパラダイム創出の一助となることを願っているが、A|S|I|A のようなオンラインのアーカイブの存在そのものを疑問視する研究者が多いことも十分了解している。デジタル化された映像は、劇場に足を運び、「リアル」な上演を見ることとはまったく異なった行為であるという指摘ももっともである。だが、デジタル・アーカイブの存在は、上演のリアリティをどこに求めるかという上演研究の長年の課題を考える一つのきっかけになりうると私たちは考えている。

A|S|I|A は、デジタル化が進む昨今の世の中で、出版物を手がかりとする従来の伝統的な上演研究を打ち破る新たな手法を模索する試みでもある。まず、デジタル・アーカイブ制作そのものが、共同研究の新たな研究の形である。さらに、A|S|I|A は従来のデジタル化されたアーカイブとは異なり、一方的に情報を与えるものではなく、研究者・学習者自身が主体的にリサーチするようにデザインされ、徹底した能動性を備えている。オンラインで展開される多言語のディスカッションは、一人の筆者が一つの論考を生み出していく従来の思考方法とは異なった研究モデルを生み出す可能性をはらんでいるのだ。また、A|S|I|A の利用者は自由に自らの手で情報収集することになるが、これはほかのデジタル化されたアーカイブと大きく異なる点である。バブルが次々と展開するデザインなど、A|S|I|A のインターフェイスは一見使いづらいが、これも、利用者に道筋を示して、一方的でコントロールされた情報を提供するのではなく、最大限の自由を与えたいという私たちの意志の表明なのである。

アジアの文化は多くの異なった要素を兼ね備えたさまざまなシェイクスピア上演を生み出してきた。こうした混淆を理解するために、A|S|I|A が、従来の、一方的で出版物に頼った上演研究を

⁷ Christie Carson, "eShakespeare and Performance." *Shakespeare*, Volume 4, Issue 3 (Sept. 2008), pp. 254-70 参照。

覆し、アジアのシェイクスピア上演の複雑さや多様性を語る新たなパラダイムを生み出すきっかけになることを望んでやまない。

補論：小林かおり氏の研究

末松美知子

小林かおり氏は、常々自らを演劇史の研究者 'Theatre historian' と呼んでいた。その氏の研究には3つの柱があったように思う。第一の柱は、バーミンガム大学シェイクスピア研究所留学中から続けていた現代の日英シェイクスピア上演作品の比較研究である。その成果は、日本演劇学会で河竹賞奨励賞を受賞した大著『じゃじゃ馬たちの文化史』に結実した⁸。数年かけた研究を博士論文に仕上げ、その論文を下敷きにして書かれたこの好著は、広く一般にも読まれることとなった。日英の『じゃじゃ馬馴らし』の上演作品を作品が生まれた社会的・文化的コンテクストにおいて読み解く筆致はさえているが、それに劣らず圧倒的なのが参考文献目録である。小林氏は、一つの研究に着手する際、まず文献を徹底的に集めることから始めていた。これは、シェイクスピア研究所で院生として受けた薫陶によるとのことであった。数年前に、日本のシェイクスピア上演研究の新たなパラダイムを模索した小林氏の編著『日本のシェイクスピア上演研究の現在』に筆者が寄稿した際にも、小林氏からまず詳細な参考文献目録作成を指示され、完璧な目録作りをめざすその姿勢に圧倒されたことを覚えている⁹。また、劇場で「生」の公演を観ずしてこのような比較上演研究を行うことはできない。東に西に、シェイクスピア上演を求めて国内外を小林氏と行脚して積み重ねた観劇体験は、筆者にとっても大切な財産となっている。

小林氏の研究の2つ目の柱は、演劇学会の共同発表でも報告した A|S|I|A プロジェクトである。ウェブ・アーカイブ A|S|I|A (Asian Shakespeare Intercultural Archive) は、国外の学会でのアジアの研究者たちとの幸運な出会いがその発端である。シンガポール国立大学演劇学科主任 Li Lan Yong 准教授、韓国順天郷大学の Hyon-u Lee 教授らと語り合う中で、アジアから、アジアのシェイクスピア上演に関する新たなプロジェクトを立ち上げるという構想が生まれた。同じアジアでありながら、互いの国のシェイクスピア上演に触れる機会が無く情報が乏しいという状況を打開すべく、いつでも、どこでも、上演映像を観ることが可能な、ウェブ・アーカイブの構築を計画したのである。日本からは、構想段階より小林氏と筆者の2人が参加している。演劇学会の発表でも言及しているが、当初はアメリカから MIT も参加し、太平洋をまたぐ大がかりなプロジェクトを計画したが、方針の違いから袂を分かってそれぞれ別のウェブ・アーカイブを構築することとなった。

2006年から始動した A|S|I|A が第1期の作品を公開したのは、2009年である。小林氏は、A|S|I|Ak

⁸ 小林かおり『じゃじゃ馬たちの文化史～シェイクスピア上演と女の歴史～』（南雲堂、2007年）

⁹ 小林かおり編『日本のシェイクスピア上演研究の現在』（風媒社、2009年）

共同代表の一人として、主に日本のシェイクスピア上演作品映像の取得と著作権処理、広報を担当した。氏の熱心な交渉により、多くの演劇関係者が A|S|I|A の趣旨に賛同し、アーカイブの核となる作品映像や上演台本、パンフレット、写真などの資料を無料で提供してくれた。また、このプロジェクトは、幸運にも複数回科学研究費により助成を受け、海外のチームと共に研究を継続することができた。新たな手法で、インターカルチュラルな視点から現代アジアのシェイクスピア上演と取り組む契機となったこのプロジェクトに共同研究者として小林氏と取り組み、一定の成果をあげることができたように思う。

亡くなる直前の2015年夏まで小林氏が打ち込んでいたのが、3つ目の柱、明治初期に日本を訪れた西洋人劇団の巡業に関わる研究である。研究代表者として科研費による助成も複数回受けており、ゆくゆくはこの研究で著書の出版を考えていたライフワークであった¹⁰。坪内逍遙を緒に明治期のシェイクスピア上演に関心を持った小林氏は、名古屋大学名誉教授の故升本匡彦氏より明治時代に来日した西洋人劇団に関する貴重な一次資料を譲り受け、それらの分析を開始していた。その研究の一部が、西洋人劇団の巡業公演が日本とインドに与えた影響をまとめて *New Theatre Quarterly* に発表した “‘The Actors are Come Hither’: Shakespeare Productions by Travelling Companies in Asia” である¹¹。2015年夏にこの論文を日本語でまとめ直したものが氏の遺稿となった。この論文は、2016年4月に上梓された『異文化理解とパフォーマンス』に収められている¹²。

さらに小林氏は、20世紀初頭の西洋人劇団の巡業を世界的規模で捉え直す目的で、2016年8月に英国で開催予定された世界最大規模のシェイクスピア学会 World Shakespeare Congress 2016 のパネル・セッションに、パネル・リーダーとして応募していた。小林氏が提案した、オーストラリア、日本、マレーシア、インドと西洋人劇団の足跡を辿り、各地のシェイクスピア上演に与えた影響を検証するというパネルの趣旨が認められ、アジアのシェイクスピア上演をテーマとする唯一のパネル・セッションとして学会プログラムに選定されたのである。学会を前にパネル・リーダーを失った私達発表者たちは途方にくれたが、コメンテーターとしてパネル・セッションに加わっていたバーミンガム大学シェイクスピア研究所所長のマイケル・ドブソン教授の助力もあり、残されたメンバーで無事2016年8月1日にセッションを終了することができた¹³。その内容は、ケンブリッジ大学出版による次号の *Shakespeare Survey* (Vol. 70) に掲載される予定である。筆者も寄稿予定であるが、小林氏の意欲的な計画無しにはこのパネルが実現しなかったこと、このパネルが小林氏に捧げられたことに言及するつもりである。

¹⁰ 西洋人劇団に関する小林氏の科研費助成は、2000-2001年度奨励研究(A) 12710293、2010-2012年度基盤研究(C) 22520274、2013-2014年度基盤研究(C) 25370295の3件である。

¹¹ Kaori Kobayashi, “‘The Actors Are Come Hither’: Shakespeare Productions by Travelling Companies in Asia”, *New Theatre Quarterly*, Volume 32, Issue 1 (Feb. 2016), pp. 49-60.

¹² この論文『『どうして旅回りなんかしている？都にいた方が人気も儲けも上がるだろうに』～西洋人巡業劇団によるシェイクスピア上演』は、筑波大学の浜名恵美教授の退職を記念したフェストシュリフトに寄稿された。松田幸子、笹山敬輔、姚紅編『異文化理解とパフォーマンス』（春風社、2016年）、pp.351-77。

¹³ 小林氏がリーダーとして計画した World Shakespeare Congress 2016 パネル・セッション：‘The actors are come hither’: Shakespearean Productions by Travelling Companies in the British Empire and Asia は、Michael Dobson バーミンガム大学教授による司会で、Nurul Farhana Low bt Abdullah マレーシアサインズ大学准教授、Li Lan Yong シンガポール国立大学准教授、Catherine Mallyon ロイヤル・シェイクスピア劇団事務局長、末松の4人が発表した。

道半ばで先だった小林氏が今後成しえたであろう研究成果を思うと言葉がない。アジアのシェイクスピア上演研究にとって大きな損失である。氏の早世が、国内外の多くの演劇研究者から惜しまれていることを付け加えておきたい。

最後に、10年以上共同研究を続けてきた A|S|I|A プロジェクトチームが四カ国語で氏に寄せたメッセージの日本語版を、ここに紹介する¹⁴。

小林かおり先生を偲んで

A|S|I|A 創設時からのパートナーである、小林かおり教授が逝去されました。プロジェクトの立ち上げにあたり、小林先生はその学識とオープンな姿勢でプロジェクトの方向性を示してくださいました。多くの劇団との協力関係を作り、アーカイブの収録作品を精力的に開拓する一方で、アーカイブのインターフェースを完全多言語化することを主張されたのも小林先生でした。常に新しいものにトライする先生の姿勢からプロジェクトチームは多くを学び、先生の広範なネットワークと旺盛な好奇心は我々の仕事をさまざまな分野に結びつけてくれました。困難に直面した時にも、小林先生の深い思慮、気配り、絶えることのないユーモアと楽観主義が私たちを助け、チームにつながりと暖かな思いやりをもたらしてくれました。先生の寛容さと思慮がプロジェクトにバランスをもたらしてくれたのです。A|S|I|A に込められた先生の思いはこれからも生きていくことでしょう。しかし、先生を失った悲しみは消えることはありません。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

¹⁴ このメッセージは、2015年10月に A|S|I|A ホームページに掲載された。

